中等教育におけるニュースリテラシー教育の現状と分析

Current Status and Analysis of News Literacy Education in Secondary Education

河居貴司*　合田美子**　喜多敏博**　江川良裕**
Takashi Kawai*　Yoshiko Goda**　Toshihiro Kita**　Yoshihiro Ekawa**

*熊本大学 大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻
**熊本大学 半導体・デジタル研究教育機構
*Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University
**Research and Education Institute for Semiconductors and Informatics, Kumamoto University

＜あらまし＞インターネットや SNS の普及に伴い，誰もが情報発信できる時代となるなか，フェイクニュースが社会問題になるなど，情報を読み解く力を養うことの重要性が高まっている．本研究では、主に中高生が学ぶニュースリテラシー学習の現状について調べた．ニュースという流動的な素材が教材であることもあり，現場の教員にとっては教材づくりが煩雑であることのほか，評価法が未確立といった課題が明らかになった．

＜キーワード＞　ニュースリテラシー，NIE，クリティカル思考

1. はじめに

「総合的な学習の時間」や高等学校で必修化された「総合的な探究の時間」は，探究的な見方や考え方を働かせ，横断的・総合的な学習を行うことを通して，よりよく課題を解決し,自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目的としている．文部科学省の学習指導要領には情報活用能力の育成のため新聞を活用することが明記されており，横断的な学習を行うツールなどとして，新聞が使われることがある．新聞を使った教育活動にはＮＩＥ（Newspaper In Education）の取り組みの蓄積もある．

こうした学習は，メディア・リテラシーの領域でも扱われるが，なかでも，ニュースリテラシーを身につけることは，クリティカルな思考を育てることにもつながると期待される．坂本（2022）は「ニュースリテラシーはジャーナリズムの基礎知識とニュースを中心とした多様なオンライン情報を読み解く能力」と指摘．情報活用のあり方を考えるうえで，大事な考え方のひとつになっている．

2. 目的

ニュースを使った学習に取り組む先進事例を調べ，課題を分析することを目的とした．

3. 方法

学習実践例や，それをまとめた文献を調査したほか，日本新聞協会が作成した「新聞を活用した教育実践データベース」に寄せられた実践例を調査．さらに，先進的な実践を行う学校で教員や生徒らに半構造化インタビューを実施した．

インタビューは 2024 年 5 月 24 日に兵庫県宝塚市の雲雀丘学園中で生徒と社会科教諭に対し，同年 6 月 4 日に大阪府東大阪市の近畿大学付属中で総合学習担当の国語科教諭に対し，それぞれ行った．雲雀丘学園中はワークシート（WS）で学習．近大付中は学校を紹介する新聞制作の取り組みをしている．分析にはメリルの ID 第一原理を用いた．

4. 結果と考察

教育実践データベースにあった NIE の実践例は計 1602 件．学習形態の分類で，新聞のことを学ぶ事例は 235 件，新聞をつくる実践は 418 件，新聞を使って学ぶ取り組みは 1398 件あった．うち中学・高校向けの実践は 942 件あり，総合学習だけでなく国語，社会のほか数学の時間に取り組んだ事例もあった．ニュースリテラシー学習と親和性が高い「新聞の読み比べ」をキーワードにあげる中学・高校の実践も 223 件あり，複数紙を読むことで比較検討を促す形式が目立った．

読み比べの実践としては全国紙と地方紙の報じ方を比較する二田（2023）の取り組みなどがあり、ニュースを通じクリティカル思考

を育てようと試みる事例が確認できた．手塚ら（2021）は日本教育メディア学会に報告されたメディア・リテラシー教育の実践研究122件を分析,「教材開発」「評価・目標達成」をテーマにした実践研究は少なく、今後の課題としていた。

実地調査した2校と二田の実践（奈良女子大付属中等教育学校）を比較したのが表1である．

３校の実践比較（表１）

	雲雀丘	近大付	奈良女付
対象	中２	中２	中３・高１
手法	記事読解	新聞制作	読み比べ
教科	朝学習	総合学習	国語
目標	記事を読み，自分の考えをまとめる	正しい情報を知る文章で発信する	報道文を比較して読もう
学習概要	WSで段階的な３問に応える	学校関係者に取材執筆し新聞制作	東京五輪の記事を全国紙と地方紙で比較

インタビューに対し教員たちは「新聞を使った学習は文章表現力などを育てるうえで有効だと実感している」と話していた．雲雀丘学園中の担当教諭はWS学習で「後日，他者の回答例を紹介しているが，これが学習効果につながっていると感じる」と指摘していた．また，近大付中の実践は学習成果を次年度学習としての自分史執筆などにつなげる狙いがあるとしていた．

一方，学習者の評価という点ではともに未確立な現状があるとしていた．また，コストの問題や，教師の経験不足、準備の煩雑さといった事情から，教材開発が滞る場合もあることも分かった．

これらの点も踏まえ，ニュースを使った学習実践の特徴をID第一原理の「問題，活性化，例示，応用，結合」の５つの観点で分析した．

（問題）ニュース活用は，実際に起きた現実的な事柄として学習者に提示できる利点がある．記事を教師が選ぶ場合，生徒に身近な素材が適切に選ばれているが，学習者自身に選ばせる場合は手助けも必要だろう．

（活性化）ニュース読解は，学習者が記事の閲覧によって間接体験をする行為でもある．これまでの経験や知識とニュースを結び付けること促したり，その後，ほかの学習や経験に関連づけていくしかけが大切になる．

（例示）記事をモデルに文章を書くことなどから起承転結ではない事実を伝える文章のあり方を学べるが，その場に応じた適切な例示ができているか考える必要がある。

（応用）ニュースによって知識を得るだけにしないようにするには，知識を生かすチャンスを設けることも重要.記事の読み比べでも，新聞比較にとどまらずインターネット情報などとの比較など発展の可能性もある．

（統合）身につけた思考やスキルを試す演習的な実践の蓄積は多くはないことが確認できた．プログラムのなかで，学習で得た知識やスキルを転移できるよう促す形はとれないか検討の余地がある．

ニュースリテラシー教育の学習目標として想定されるものは，第一に，メディアの仕組みや特性を知り他者に説明できること．第二に,発信者の意図を意識し批判的な思考でニュースに接することができること．第三にデジタルシチズンシップの考えに基づき，デジタル空間においても市民社会の一員としてふさわしい態度を持つこと―があげられる．ただ，記事読解や文章力向上を目指す実践は一定数あるが，これらの学習目標に対応した教材開発の蓄積は多くはない．

5. 今後の計画

ニュースやインターネット情報を活用しながら「批判的思考・態度」を身につけることを目指す学習プログラムの開発を目指したい。現場教員が多様な教材バリエーションを開発できるテンプレート的な構造とする．また，生徒の学習目標の達成度を判断できるような①評価の観点（規準）とその観点における尺度を段階に分けて記述する②評価基準で構成されるルーブリックの開発を目指す．

参考文献

坂本旬，山脇岳志（2022）メディアリテラシー 吟味思考を育む，時事通信社 72‐94

二田貴広（2023）全国紙と地方紙の比較から育成する「メディアリテラシー」. メディア情報リテラシー研究，第４巻第１号

手塚和佳奈ほか(2021)日本教育メディア学会における学校教育を対象としたメディア・リテラシー教育の実践研究の整理からみる今後の実践課題. 教育メディア研究, Vol27.No2, 101‐119